

鎌倉女子大学における心理学専攻学生による

ボランティア活動のもつ意味

——実態と今後の支援について——

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科・講師)

Significance of Volunteer Activities Conducted by Psychology
Majors at Kamakura Women's University:
Current Situation and Providing Support in the Future

Ito, Kanako

Abstract

The purpose of this study is to investigate what kind of significance volunteer activities have on students, and to consider what kind of support is needed. What current volunteer activities they are involved in, what they have learned from it, their concerns, and support needs for the future were among the items asked in the survey.

As a result, it was made clear that many students hoped to be provided support. This suggested that there is a necessity for the provision of career support which enables them to connect volunteer activities to their careers, and also the need for psychological support.

Key words: volunteer activities, students of psychology majors, psychological support

キーワード：ボランティア活動、心理学専攻学生、心理面へのサポート

I. 問題と目的

2002年の中央教育審議会の答申において、小・中・高等学校のボランティアの義務化が提唱された(文部科学省, 2002)。大学においても、ボランティアの教育的効果を期待し、ボランティアに関する内容を授業科目として設定したり、ボランティア活動を単位認定したり、ボランティアセンターを学内に設置したり、専任のボランティア・コーディネーターを配置したりなど、さまざまな学生支援が実施されるようになってきた。

さらに、1997年の教育職員養成審議会の答申に

において、教員養成系大学の学生に対し、さまざまな体験活動を通して、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力を養うような機会の設置の重要性が指摘されたこととともない、学生が教育現場に入って活動する学力向上支援ボランティアや、スクールボランティアや、フレンドシップと呼ばれるような取り組みが盛んになっている(文部科学省, 1997)。

では、大学生にとってボランティア活動にはどのような意義があるのか。まず、一般的な特徴や傾向に関する先行研究を見ていく。倉掛・大谷

(2004) は、大学生に多く見られるというく自分のため>ボランティア観の様相について実態調査した。<自分のため>ボランティア観とは、仁平(1999)によるもので、「自分独自の見返りを求めて行われる活動が結果として他者の幸福や社会の改善に結び付く」とするボランティア観を指し、「他人や社会のためのボランティア」の<人のため>ボランティア観と対比する概念を指す。その結果、仲間との交流ができる等の仲間意識がボランティアに大きく関係することが明らかになり、情緒的要因、連帶的要因、成長的要因、慈善的要因の4要因がボランティアの継続要因となると提唱した。また、ボランティア継続時の人間関係を中心とした葛藤は軽視できないため、ボランティア・コーディネーターや構成員が学生の内面の把握と心理面への援助を行う必要性を示唆した。

続いて、対人援助等に関する専門職養成系の大学における先行研究を見てみると、看護師養成系大学、保育者養成系大学、教員養成系大学における研究が多い。

特に、看護師養成系大学における看護学生への調査研究が多く(例えば、岩田,2001;西上ら,2001;柿原ら,2003)、学生は、将来、看護職として働く時に役立つような対応等を体験学習し、ボランティア対象者に対する肯定的理解を高めたことが明らかとなった。

保育養成系大学については、保育や施設実習の事前体験学習としてのボランティアの効果と課題についての研究が多い(藤井ら,1998;金子ら,1998;藤井,2002)。そして、実習前のボランティア活動は、学生にとって、実習先についての体験学習となり、実習に効果をもたらし、実習前の不安の低減にも結びつくことが明らかとなった。

また、教員養成系大学については、前述のスクールボランティア等に関する事例研究や実践研究が多い。例えば、松浦(2003)は、教員養成学部学生によるスクールボランティア活動について事例研究を行った結果、その活動が、学生の①対人応答力、②生徒理解力、③問題解決力の3つの力量を形成する可能性があるとし、教員養成における新たなシステムとして、教育実習の他に、この

ような学校支援活動としてのボランティア活動の有用性を指摘した。しかし、ボランティア活動はあくまでも主体の自発性・自主性にもとづくものであり、活動を義務づけることはその精神を解体するに等しいであろうと指摘し、大学の授業の必修や単位化には本来なじまないものだとも提言している。

続いて、心理学専攻の学生のみを対象とした調査研究は非常に少なく、心理臨床部門に関するボランティア活動の先行研究の中で、心理学専攻学生が行った事例が挙げられる程度である。中でも、メンタルフレンドやハートフルフレンドと呼ばれるような、児童相談所や教育委員会等による、不登校児童・生徒への学生による家庭訪問相談事業というボランティア活動に関する研究が非常に多い(例えば、伊藤,2001;酒井・伊藤,2001;飯田,2002)。このボランティアは、他のボランティアと異なり、学生ボランティアに対する研修指導などの制度が比較的整っており、交通費支給等というような有償の場合が多いため、このような活動の特質についての研究が多くなされている。

以上のように、心理学専攻学生のみを対象とした先行研究や、学生の内面に注目した先行研究や、所属学科の特徴を踏まえた上での比較検討、及び、学生側からの具体的な支援ニーズと実際の支援のあり方、ボランティア活動を通じての学生の抱える具体的な葛藤や悩みに関する先行研究は少ない。

そこで、本研究においては、子ども心理学科の学生を調査対象者とし、心理学専攻学生によるボランティア活動のもつ意味について実態調査にて明らかにし、大学における今後の支援と関連させて考察することを目的とする。本学科の理念の一つに、心理学の知識や技術を将来に活かすことができる学生の養成を挙げているため、将来の進路に、心理学や教育に関する専門職を挙げる学生が多く、その専門職に必要な免許・資格の修得への目的意識が比較的強いという特徴が伺える。しかし、教員志望者が教育実習を経験するのは4年生になってからとかなり年数がある。また、臨床心理分野の養成校ではないため、心理臨床実習とい

うものはない。よって、学生は、アルバイトやボランティア活動という実践場面で、大学での学びを活かしているものと思われる。また、本学科は新設学科ゆえ、まだ卒業生がいないため、実態把握がキャリア教育等の推進に有益と考えられる。

II. 方法

1. 調査対象者

鎌倉女子大学子ども心理学科2年から4年の学生で、調査協力が得られた108名 (Table1)。

Table1.調査対象者

学年	人(%)
2年	53(49.1)
3年	37(34.3)
4年	18(16.7)
合計	108(100.0)

2. 調査時期・方法

無記名による質問紙法にて、2005年7月上旬に実施した。なお、この時期は、1年生にとっては入学直後にあたり、予備調査において、大学入学後のボランティア経験がない者がほとんどであることが明らかとなった。よって、本研究の目的に照らし合わせて、1年生は調査対象者からはずした。

3. 質問紙の構成

ボランティア活動に関する次の質問項目から成る質問紙を作成した。①ボランティア活動に対する関心度 (5段階評定)、②ボランティア活動への参加意識 (5段階評定)、③大学に入学してからのボランティア活動の有無、④ボランティアの活動分野 (多肢選択法)、⑤ボランティアを始めたきっかけ (多肢選択法)、⑥ボランティア活動の参加動機 (多肢選択法)、⑦ボランティア先でのスーパービジョンやボランティア学生研修会の有無、⑧ボランティア活動の振り返り (20項目、5段階評定)、⑨ボランティア活動を行っての悩み (20項目、5段階評定)、⑩悩みの具体的内容 (自由記述)、⑪大学の支援に対する満足度 (5段階評定)、⑫大学に求める支援の具体的内容 (自由記述) である。

①～③、⑤のボランティアに関する意識につい

ては、総務庁青少年対策本部 (1994)、森 (2002)、柿原ら (2003) を参考にして作成した。

④の活動分野は、金崎 (2005) の項目に「心理臨床」「教育・保育」の項目を追加して作成した。「心理臨床」分野は、ボランティアの活動の中である特定の課題をもった人に心理的アプローチを求められる、やや専門的技術や技法を要する活動と言える。また、「教育・保育」分野も同様に考えられるため、他の分野とは質的に異なる性質を含むため追加した。

⑥の参加動機については、Claryら (1998) が考案したボランティア動機尺度 (VFI尺度; Volunteer Functional Inventory) を富重 (2002) が日本語訳したものと、谷田 (2001) による尺度を参考にし独自に作成した。

⑧、⑨については、伊藤 (2001) がメンタルフレンド活動における学生の成長と悩みについて調査した質問項目を修正し、項目数を増やして独自に作成した。

その他の項目は、全て独自に作成した。

4. 分析

①～⑥、⑪は、実態把握を目的とした単純集計を行った。⑧、⑨は、因子分析を行った。⑩と⑫は、カテゴリ分類を行った。また、必要に応じて検定や χ^2 検定を行った。なお、本稿では、全体的な傾向を把握することを主目的とするため、学年差や進路別の分析は行わなかった。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的を説明した上、無記名式で、個人が特定されることはないこと、プライバシーは保護されることを説明し同意を得た。

III. 結果

1. ボランティア活動に対する関心と参加意識、及び、ボランティア活動の経験の有無

調査対象者108人のボランティア活動に対する関心度は、「ある程度関心を持っている」が53人 (49.1%) と最も多く、「非常に関心を持っている」の40人 (37.0%) と合わせるとこれだけで約9割を占めた (Table2)。

参加意識については、「ぜひ参加したい」が50

人 (46.3%) と最も多く、続く「どちらかといえ
ば参加したい」の36人 (33.3%) と合わせると、
これだけで約8割を占めた (Table3)。以上から、
ボランティア活動に関する関心度や参加意識は、
多くの学生が高かった。

ボランティア活動の経験については、「全く活
動したことがない」が50人 (46.3%) と最も多く、
次いで「以前活動していた」が31人 (28.7%)、
「現在活動している」が27人 (25.0%) であった
(Table4)。

ボランティア活動の経験と関心、及び、参加意
識の関係をTable5,6に示す。ボランティアの活動
状況の「現在活動中」と「以前活動していた」を

「経験あり」、「全く活動したことがなし」を「経験
なし」の2条件にし、関心度と参加意識の各々につ
いてt検定を行った。Table7に、ボランティア経
験の有無と関心度、及び、参加意識の平均と標準
偏差 (SD) を示す。まず、関心度について、t検
定の結果、両条件の平均の差は有意であった (両
側検定: $t(106) = 3.67, p < .01$)。参加意識について
もt検定の結果、両条件の平均の差は有意であ
った (両側検定: $t(106) = 3.23, p < .01$)。したがって、
ボランティア経験のない者よりも、経験がある者
の方がボランティアに関する関心度、及び、参加
意識が高いと言えた。

2. 経験者の活動状況

以下の項目では、ボランティア経験者58人の内、
記述に不備が多かった2人を除いた56人を分析対
象とした。経験者56人の活動状況を学年別に見る
と、「現在活動中」と「以前活動していた」がほ
ぼ半数ずつを占めており、約30人が現在、活動中
であった (Table8)。

Table2. ボランティア活動に対する関心度

関心度	人 (%)
非常に関心を持っている	40 (37.0)
ある程度関心を持っている	53 (49.1)
どちらとも言えない	6 (5.6)
あまり関心を持っていない	6 (5.6)
全く関心を持っていない	3 (2.8)
合計	108 (100.0)

Table3. ボランティア活動に対する参加意識

	人 (%)
ぜひ参加したい	50 (46.3)
どちらかといえば参加したい	36 (33.3)
どちらともいえない	12 (11.1)
あまり参加したくない	9 (8.3)
全く参加したくない	1 (0.9)
合計	108 (100.0)

Table4. ボランティア活動の経験

活動状況	人 (%)
現在活動している	27 (25.0)
以前活動していた	31 (28.7)
全く活動したことがない	50 (46.3)
合計	108 (100.0)

Table5. ボランティア活動の経験と関心度

活動状況	関心度					合計
	非常に関心あり	やや関心あり	どちらでもない	あまり関心ない	全く関心ない	
現在活動中	18 (16.7)	9 (8.3)	-	-	-	27 (25.0)
以前活動していた	14 (13.0)	11 (10.2)	4 (3.7)	2 (1.9)	-	31 (28.7)
全く活動なし	8 (7.4)	33 (30.6)	2 (1.9)	4 (3.7)	3 (2.8)	50 (46.3)
合計	40 (37.0)	53 (49.1)	6 (5.6)	6 (5.6)	3 (2.8)	108 (100.0)

Table6. ボランティア活動の経験と参加意識

活動の有無	参加意識					合計
	ぜひ参加したい	どちらかといえ ば参加したい	どちらとも いえない	あまり参加 したくない	全く参加 したくない	
現在活動中	19 (17.6)	8 (7.4)	-	-	-	27 (25.0)
以前活動していた	15 (13.9)	11 (10.2)	2 (1.9)	2 (1.9)	1 (0.9)	31 (28.7)
全く活動なし	16 (14.8)	17 (15.7)	10 (9.3)	7 (6.5)	-	50 (46.3)
合計	50 (46.3)	36 (33.3)	12 (11.1)	9 (8.3)	1 (0.9)	108 (100.0)

Table7. ボランティア経験と関心度, 参加意識の平均とSD

	経験あり (N=58)	経験なし (N=50)	t値
関心度	1.6(0.8)	2.2(1.0)	3.67 ***
参加意識	1.6(0.9)	2.2(1.0)	3.23 ***

*** p<.01

Table8. 学年別による活動状況

学年	活動の有無		合計 人(%)
	現在活動中	以前活動した	
2年	10(17.9)	15(26.8)	25(44.6)
3年	9(16.1)	7(12.5)	16(28.6)
4年	8(14.3)	7(12.5)	15(26.8)
合計	27(48.2)	29(51.8)	56(100.0)

3. 経験者の関心度と参加意識

ボランティア活動に対し、「非常に関心があり、ぜひ参加したい」という回答が56人中28人(50.0%)と最も多くを占め、続く「ある程度関心があり、どちらかといえば参加したい」が12人(21.4%)を占め、これらを合わせると、約7割を占めた(Table9)。前述のt検定の結果と合わせて考えると、経験者はボランティア活動に対する関心や参加意識が高いことが伺える。

4. 将来の進路

将来の進路をTable10に示す。小学校や幼稚園教諭希望者が多いことが特徴であり(合わせて約3割)、その他は、本学科の特色のとおり、医療・福祉・企業等の現場で心理学を活かすか、あるいは、子どもとかかわるという職業が多いのが特徴として見受けられた。

5. ボランティアの活動分野

「保育・教育」が最も多く、32人(48.5%)を占め、続いて、「心理臨床」「社会福祉」が各々12人(18.2%)を占めた(Table11)。これら3つを合わせると、約9割を占めた。続いて、将来の進

路と活動分野(複数箇所ある場合は、中心的な活動の一つ選択)との関係を見ると、進路希望に関連する領域や関連する対象がいる現場が多く挙げられ、やはり、小学校や幼稚園教諭希望者は、「教育・保育」分野や、学校現場や専門相談機関で何らかの課題のある子どもにかかわるような「心理臨床」分野が多く見られた(Table12)。

6. ボランティア活動のきっかけ

「大学の掲示」が23人(28.4%)と最も多く、次いで「友人や知人の勧め」(14人,17.3%)、「教

Table10. 進路

進路	人数(%)
小学校教諭	14(25.0)
幼稚園教諭	5(8.9)
小学校教諭か幼稚園教諭	1(1.8)
幼稚園教諭か保育士	1(1.8)
公務員	2(3.6)
心理職	1(1.8)
医療機関	3(5.4)
福祉施設	5(8.9)
一般企業	4(7.1)
子どもと関わる仕事	3(5.4)
障害児に関わる仕事	1(1.8)
大学院進学	2(3.6)
留学	1(1.8)
活動中に混乱・迷い	1(1.8)
未定	12(21.4)
合計	56(100.0)

Table11. ボランティアの活動分野

活動分野	複数回答可	
	人数	(%)
保育・教育	32	(48.5)
心理臨床	12	(18.2)
社会福祉	12	(18.2)
地域	4	(6.1)
レクリエーションなどの指導	3	(4.5)
国際交流	1	(1.5)
その他	2	(3.0)
合計	66	(100.0)

Table9. ボランティア経験者の関心度と参加意識

関心度		参加意識					合計 人(%)
		ぜひ参加 したい	どちらか といえば 参加したい	どちらとも いえない			
				どちらとも いえない	あまり参加 したくない	全く参加し たくない	
	非常に関心あり	28(50.0)	3(5.4)	-	-	-	31(55.4)
	ある程度関心あり	6(10.7)	12(21.4)	1(1.8)	-	-	19(33.9)
	どちらとも言えない	-	2(3.6)	1(1.8)	1(1.8)	-	4(7.1)
	あまり関心なし	-	-	-	1(1.8)	1(1.8)	2(3.6)
	全く関心なし	-	-	-	-	-	0
	合計	34(60.7)	17(30.4)	2(3.6)	2(3.6)	1(1.8)	56(100.0)

Table12.進路とボランティアの活動分野

	ボランティアの活動分野						人(%)
	保育・教育	心理臨床	社会福祉	レクリエーション	地域	その他	合計
	小学校教諭	5(8.9)	4(7.1)	2(3.6)	1(1.8)	2(3.6)	-
幼稚園教諭	2(3.6)	1(1.8)	-	1(1.8)	1(1.8)	-	5(8.9)
小学校か幼稚園	1(1.8)	-	-	-	-	-	1(1.8)
幼稚園か保育士	1(1.8)	-	-	-	-	-	1(1.8)
公務員	1(1.8)	-	1(1.8)	-	-	-	2(3.6)
心理職	1(1.8)	-	-	-	-	-	1(1.8)
医療機関	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	-	-	-	3(5.4)
福祉施設	3(5.4)	-	-	1(1.8)	-	1(1.8)	5(8.9)
一般企業	1(1.8)	-	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	-	4(7.1)
子どもと関わる仕事	2(3.6)	-	-	1(1.8)	-	-	3(5.4)
障害児に関わる仕事	1(1.8)	-	-	-	-	-	1(1.8)
大学院進学	1(1.8)	1(1.8)	-	-	-	-	2(3.6)
留学	-	-	-	-	-	1(1.8)	1(1.8)
混乱	-	1(1.8)	-	-	-	-	1(1.8)
未定	5(8.9)	3(5.4)	2(3.6)	-	2(3.6)	-	12(21.4)
合計	25(44.6)	11(19.6)	7(12.5)	5(8.9)	6(10.7)	2(3.6)	56(100.0)

Table13.ボランティア活動のきっかけ

きっかけ	複数回答可
	人数(%)
大学の掲示	23(28.4)
友人や知人の勧め	14(17.3)
教員からの紹介	13(16.0)
家族や親類の勧め	9(11.1)
学校で話を聴いて	7(8.6)
自主的に直接訪問・参加	5(6.2)
新聞や地域の広報誌	4(4.9)
先輩から話を聴いて	3(3.7)
サークルでの勧め	2(2.5)
インターネット	1(1.2)
合計	81(100.0)

Table14.活動の動機

動機	複数回答可
	人数(56人中の割合)
1.地域や社会をよくしたいので	2(3.6)
2.困っている人の手助けをしたいので	14(25.5)
3.何か新しい体験をしたいので	40(71.4)
4.自分の持っている能力、経験、技術を活かしたいので	21(37.5)
5.知らない人たちと出会い、交流したいので	21(37.5)
6.その活動の対象に興味・関心があるので	46(82.1)
7.まわりの人たちがしているので	3(5.4)
8.就職や進学に有利と聞いたので	6(10.7)
9.資格や技術が得られるので	1(1.8)
10.自分がどこまでできるか、試したいので	15(26.8)
11.何かしようと思ったが、やることが他になかった	1(1.8)
12.自分が以前、同じくらい経験をしたので、困った人の気持ちがわかるから	5(8.9)
13.自分の家族がボランティア活動を大切にしてきたから	-
14.自分が必要とされているという気持ちを味わいたかったから	-

員からの紹介」(13人,16.0%)、「家族や親類の勧め」(9人,11.1%)であり、これらで約7割を占めた(Table13)。

7. 動機

「その活動の対象に興味・関心があるため」が最も多く56人中46人が挙げた。次いで、「何か新しい体験をしたいため」を56人中40人が挙げ、「自分の持っている能力、経験、技術を活かしたいので」が56人中21人だった(Table14)。

8. ボランティアの活動分野と研修会、スーパーバイズの有無

ボランティア先において、学生ボランティアへの研修会があったのは66人中15人、スーパーバイズがあったのは66人中14人と、両者とも全体の2割という結果であり、両者とも8割はないとの回答であった。研修会やスーパーバイズがあった活動分野では、「心理臨床」が最も多く(各々15件中6件,14件中6件)、次いで、「教育・保育」「社

会福祉」「地域」が挙げられた(Table15,16)。もともと心理臨床現場では、研修会やスーパーバイズ制度が普及しているため、学生ボランティア向けにも整備されているということが伺える。

9. ボランティア活動の振り返り

まず、ボランティア活動の振り返りに関する20の質問項目全てに因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施した。その結果、6因子が抽出されたが、共通性や各因子への負荷量を考慮し、固定値1以上の規準を設けて項目を抽出したため、1項目を削除し、再度、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施した。その結果、5因子が抽出された(Table17)。第1因子は、「やりがいのある活動だと思った」「人への接し方が変わった」等を含む4項目からなり、「やりがいの発見」因子と命名した。第2因子は、「職業適性を

考える上で役に立った」「進路選択する際の参考になった」等を含む3項目からなり、「キャリア形成の促進」因子と命名した。第3因子は、「新たな友人、知人ができた」「知識や技術が身についた」等を含む5項目からなり、「自己成長」因子とした。第4因子は、「ボランティア活動への関心が高まった」「もっといろいろなボランティアをしたい」等を含む5項目からなり、「ボランティア意欲の向上」因子と命名した。第5因子は、「心理学への関心が高まった」「もっと心理学を勉強したい」の2項目からなり、「心理学への学習意欲の向上」因子と命名した。

10. ボランティア活動での悩み

ボランティア活動での悩みに関する20の質問項目全てに因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、5因子が抽出された（Table18）。第1因子は、「自分がかかわった人の問題にどの程度触れてよいか悩んだ」「自分のとるべき態度がわからなくなった」等を含む3項目からなり、「かかわる程度の迷い」因子と命名した。第2因子は、「自分がかかわった人から対処の難しい相談を受けた」「自分がかかわった人が、自分に深くかかわってきすぎて負担になった」等を含む5項目からなり、「過度のかかわりへの悩み」

Table15. ボランティアの活動分野と研修会の有無

活動分野	研修会		合計
	あり	なし	
保育・教育	3	29	32
心理臨床	6	6	12
社会福祉	2	10	12
地域	1	3	4
レクレーションなどの指導	1	2	3
国際交流	1	0	1
その他	1	1	2
合計	15(22.7)	51(77.3)	66(100.0)

Table16. ボランティアの活動分野とスーパーバイズの有無

活動分野	スーパーバイズ		合計
	あり	なし	
保育・教育	1	31	32
心理臨床	6	6	12
社会福祉	3	9	12
地域	2	2	4
レクレーションなどの指導	1	2	3
国際交流	0	1	1
その他	1	1	2
合計	14(21.2)	52(78.8)	66(100.0)

Table17. ボランティア活動の振り返りの因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	平均(SD)
14. 生活のはりが増した	0.69	0.17	0.32	0.05	-0.13	3.61(1.02)
17. やりがいがある活動だと思った	0.64	0.21	-0.01	0.29	0.23	4.45(0.76)
9. 人への接し方が変わった	0.54	0.37	0.20	0.29	0.18	3.66(1.00)
10. 相手の視点からものを見られるようになった	0.53	-0.06	0.42	0.22	0.25	3.96(0.81)
7. 自分の職業適性を考える上で役に立った	0.07	0.82	0.15	0.25	0.05	3.98(0.94)
6. 自分が進路選択する際の参考になった	0.23	0.72	0.14	0.09	0.23	3.95(0.92)
4. 教育への関心が高まった	0.10	0.70	0.06	0.16	0.18	4.13(0.90)
19. 新たな友人、知人ができた	-0.01	0.27	0.72	0.03	0.24	3.77(1.22)
20. 知識や技術が身についた	0.31	0.18	0.68	0.14	-0.16	3.61(0.97)
11. 自分も人に支えられていると思った	0.25	0.04	0.57	0.31	-0.02	4.14(0.92)
12. 考え方が柔軟になった	0.52	-0.06	0.53	0.29	0.01	3.68(0.96)
15. 自分の新たな一面に気づいた	0.44	0.39	0.45	-0.13	0.15	3.77(0.87)
2. ボランティア活動への関心が高まった	0.18	0.13	0.24	0.91	0.19	4.45(0.81)
1. ボランティアでかかわった人への関心が高まった	0.31	0.27	0.07	0.60	0.25	4.68(0.54)
18. もっといろいろなボランティアをしたいと思った	0.08	0.35	0.10	0.57	0.19	4.21(0.99)
13. 他人の立場や気持ちを汲み取れるようになった	0.39	0.01	0.39	0.43	0.26	3.88(0.81)
8. 人に必要とされていると感じられるようになった	0.37	0.26	0.32	0.37	0.01	3.59(0.97)
3. 心理学への関心が高まった	0.17	0.18	-0.01	0.24	0.82	3.75(1.13)
5. もっと心理学を勉強したい気持ちが高まった	0.00	0.36	0.10	0.20	0.68	3.95(1.07)
因子寄与	2.60	2.59	2.49	2.46	1.70	
累積寄与率	13.70	27.33	40.46	53.41	62.37	

- 因子1. やりがいの発見
- 因子2. キャリア形成の促進
- 因子3. 自己成長
- 因子4. ボランティア意欲の向上
- 因子5. 心理学への学習意欲の向上

Table18. ボランティア活動での悩みの因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	平均(SD)
6. 自分がかかわった人の問題にどの程度触れてよいか悩んだ	0.86	0.08	-0.05	0.14	0.07	3.68(1.27)
7. 自分にとるべき態度がわからなくなった	0.84	-0.02	0.07	0.11	0.09	3.54(1.35)
1. 自分が役に立っているのかわからなくなった	0.62	0.03	0.50	-0.09	-0.13	3.20(1.24)
3. 自分がかかわった人から対処の難しい相談を受けた	0.13	0.81	0.08	0.21	-0.05	2.38(1.34)
2. 自分がかかわった人から、個人的な相談を持ちかけられた	-0.29	0.68	-0.08	0.15	-0.09	2.52(1.41)
13. 活動時間以外に自分がかかわった人やその家族が連絡を取ってきた	-0.03	0.64	-0.16	0.03	0.09	1.68(1.35)
12. 自分がかかわった人が、自分に深くかかわってきすぎて負担になった	0.28	0.60	0.19	0.09	0.21	1.61(0.98)
8. 自分がかかわった人から過度の謝礼を渡されて困った	-0.01	0.53	0.22	-0.10	-0.01	1.66(0.94)
16. 自分の思っていた活動ができなかった	0.25	0.06	0.60	-0.12	0.34	2.54(1.29)
15. 身近に困ったことを相談できる人がいなかった	0.36	0.14	0.57	0.02	0.20	2.14(1.18)
17. 特に、得るものがない活動だった	0.00	-0.02	0.53	0.28	0.15	1.38(0.68)
5. 活動がマンネリ化した	-0.01	0.03	0.52	0.16	0.02	2.36(1.17)
14. ボランティア学生の指導職員と活動方針が合わなかった	-0.17	0.11	0.48	0.10	0.38	1.48(0.83)
9. 活動にかかるお金が負担になった	-0.09	0.11	0.01	0.66	0.16	1.86(1.35)
10. かかわった人のすべてを、自分一人で背負っているような負担を感じた	0.25	0.46	0.31	0.64	0.07	1.61(0.98)
18. 最後までできるか、心配だった	0.26	0.02	0.29	0.53	0.06	2.71(1.32)
4. ボランティアの主催職員と連携を取るのが困難だった	0.06	0.06	0.27	0.14	0.52	2.36(1.18)
20. その活動に必要な技術や知識を持っていなかった	0.47	-0.09	0.03	-0.14	0.50	2.91(1.16)
19. 学校が忙しくて両立できなかった	0.01	-0.04	0.05	0.29	0.44	2.54(1.43)
11. 自分自身の心の悩みなど(不登校体験など)が喚起された	0.09	0.35	0.25	0.05	0.40	1.86(1.14)
因子寄与	2.60	2.58	2.18	1.50	1.32	
累積寄与率	13.02	25.91	36.82	44.33	50.92	

- 因子1. かかわる程度の迷い
 因子2. 過度のかかわりへの悩み
 因子3. 無力感
 因子4. 心理・物理面の負担
 因子5. バランスの難しさ

因子と命名した。第3因子は、「自分の思っていた活動ができなかった」「特に、得るものがなかった」等を含む5項目からなり、「無力感」因子と命名した。第4因子は、「活動にかかるお金が負担になった」「自分がかかわった人のすべてを、自分一人で背負っているような負担を感じた」等を含む3項目からなり、「心理・物理面での負担」因子と命名した。第5因子は、「ボランティアの主催職員と連携を取るのが困難だった」「学校が忙しくて両立できなかった」等の4項目からなり、「バランスの難しさ」因子と命名した。以上より、かかわり上での悩みに関する因子が多く、それらは、学生本人の力だけで解決を見ることができない事柄を含んでいるように推測できよう。

11. 悩んだ体験の有無と、悩みの具体的内容

ボランティア活動中に悩んだり傷ついたりした経験があったという者は34人(60.7%)で、何らかの悩みや傷つき経験をした者が多いことがわかった(Table19)。

悩んだ経験があった者のその悩みの具体的内容をカテゴリー分類し、まとめたのがTable20であ

る。具体的内容は8カテゴリーに分類された。多かったカテゴリーを順に見ると、「1.かかわりの難しさ・わからなさ」「2.自分の対応を内省しての落ち込み」「3.人間関係の難しさ」「4.子どもから受けた傷つき」で、すべて対人関係にまつわるものであり、これらで全体の約8割を占めた。次いで、精神的苦痛など、より内面深くにまで及ぶ傷つき体験が挙げられた。

Table19. 悩みの有無

	人(%)
悩みあり	34(60.7)
悩みなし	22(39.3)
合計	56(100.0)

12. 大学の支援に対する満足度と大学への支援要望の具体的内容

大学のボランティア支援に対する満足度は、「どちらでもない」が最も多く、約5割を占めた。次いで、「やや満足」「やや不満足」が各々約2割を占めた(Table21)。また、ボランティア活動実施中に悩んだ経験の有無による大学の支援に対す

る満足度について、t検定を実施したところ、有意差は見られなかった（平均1.59, SD=4.96, 両側検定：t(54) = 0.32, p>.10）。

大学への支援要望の具体的内容をカテゴリー分類し、まとめたのがTable22である。具体的内容は、6カテゴリーに分類された。最も多いのが、大学支援として「現状維持」を望むとするもので、約3割を占め、ボランティア活動は本人の自主的活動ゆえ、大学支援の必要はないとする自由記述が見られた。続いて、「ボランティアの充実」が挙げられ（約2割）、より多くの種類や、より広範囲の地域のボランティアを紹介してほしい等の自由記述が見られた。続いて、「悩み等の相談窓口の開設」「事前情報の提供」が挙がり、これらで約3割を占めた。特に、ボランティア活動を通じての悩みの相談やスーパーバイズ、ボランティアに関する勉強会、ボランティアの質の判断等の実施を求めていることが自由記述に見られた。さらに、「講義とボランティアの兼ね合い」に関して、ボランティア活動での講義欠席への考慮を挙げる自由記述も見られた。

Table21.大学の支援に対する満足度

満足度	人数(%)
とても満足	—
やや満足	13(23.2)
どちらでもない	26(46.4)
やや不満足	11(19.6)
とても不満足	4(7.1)
無記入	2(3.6)
合計	56(100.0)

IV. 考察

1. ボランティアの受け止め

ボランティア活動を行っている者は、ボランティアに対する興味・関心、及び、参加意識が高いことが伺えた。

また、動機としては、自己成長に基づく動機が多く見られ、仁平（1999）による自分のためボランティア観が強い傾向が伺えた。富重（2002）の研究では、学生のボランティア動機として6因子が抽出され、「新たな理解のため」「自己のキャリアのため」という因子が高く、「自尊感情の向上のため」「友人・知人からの評価を上げるため」「寂しさから自分を守るため」「真に他人のため」は低いという結果であった。本研究に照らし合わせると、前二者は非常に高いが、後者の他者評価

Table20.悩みがある人の具体的内容

カテゴリー	人数(%)	具体的記述内容(人数)
1.かかわりの難しさ・わからなさ	14(41.2)	対応が難しく困った(5人)
		対応に悩み、とまどった(3人)
		意思疎通が難しかった(1人)
		かかわり方でわからない事、戸惑う事が多い(3人)
		どう動いたらよいかわからず落ち込んだ(1人)
		遊びの知識がなく、かわれなかった(1人)
2.自分の対応を内省しての落ち込み	8(23.5)	子どもへの対応で自己嫌悪になり、気分が落ち込んだ(3人)
		相手を傷つけてしまったのではないかと不安を感じた(2人)
		自分のかかわりに疑問を感じた(1人)
		積極性に欠けたことに落ち込んだ(1人)
		自分に何ができるかわからなくなった(1人)
3.人間関係の難しさ	3(8.7)	ボランティア先での職員間の人間関係の悪さ(2人)
		ボランティア同士の協力ができなかった(1人)
4.子どもから受けた傷つき	2(5.9)	子どもから暴力を受け、傷ついた(1人)
		子どもからの嫌な言葉に傷ついた(1人)
5.精神的苦痛	2(5.9)	精神的に辛かった(1人)
		相談できる人がいなくて困った(1人)
6.無力感	2(5.9)	ボランティアの数が多すぎ、必要とされていないと感じた(1人)
		試合に負けた時(1人)
7.時間的都合	1(2.9)	大学が忙しくてボランティア活動に行けなくなり後悔した(1人)
8.現実とのギャップ	1(2.9)	理想と現実のギャップに苦しんだ(1人)
9.無記入	1(2.9)	無記入(1人)
合計	34(100.0)	

の向上や社会貢献のためという動機はほとんど見られなかったことが特徴である。本学科の学生は、ボランティア活動始める前から、将来の進路や自己実現との関連でボランティアでかかわる対象者やかかわる現場の吟味がなされていることが伺え、それゆえに、ボランティアを振り返っての考えとして、「対象者への関心の高まり」が上位を占めていると考えられる。さらに、普段の講義の中でも自己内省する機会や、具体的な心理臨床の技術・技法に触れる機会が多いと思われる。それらを、実体験としてボランティア活動の中で活かし、知識・技術の定着化を図ったりして、新しい体験や自己の力を試しているように思われ、ボランティアが企業でのインターンシップと近いものとして位置づけられているようにも思われる。

酒井・伊藤(2001)は、学生による不登校児のケアについて面接調査した結果、学生は、臨床心理学を学んでいるため、臨床の現場に触れたいという動機や、「自分探し」とでもいう、自分が何をやりたいのか、どのようなことに向いているのかをボランティア活動を通じて考えたいという動機が見られたと述べており、このような傾向が本学科の学生にも伺えるように思われた。

きっかけは、大学生活での重要な情報源である大学掲示板からの情報獲得が多く、続いては身近

な人からの紹介・勧めにより直接的に情報獲得していることが伺えた。したがって、ある程度、ボランティア活動の内容の吟味が学生以外の者の目によってもなされている現状が伺え、ある程度信頼性が高く、学生の安全性が確保されるようなものが学生に提供されている状況が伺え、これも大学による重要な支援の一つと言って良いだろう。

2. ボランティア経験からの学び

ボランティア活動で対象者とのかかわりを通じて、自分の対応のあり方に悩み、内省し、さらに自己成長にまでつなげている様子が伺えた。しかし、中には、深く傷ついた経験をもつ者もおり、メンタルケアの必要性が示唆された。

この傾向は、伊藤(2001)による、学生による不登校児への家庭訪問事業での学生の学びを調査した研究でも見られており、心理臨床の専門家ではなく、学生という非専門家が活動することの意義は高いが、一方で、学生は、非専門家ゆえに対象児とのかかわり方に悩みを抱きやすいことも明らかにされた。そして、積極的なかかわりができるようになるほど自己成長が促されていくが、同時に、経験の深まりにともない「抱え込み」による悩みが増大すると述べている。この傾向が、本研究でも見られ、じっくりとかかわり、悩む傾向は、心理学専攻という側面からの影響もあるようにも考えられよう。

Table 22. 大学への支援要望

カテゴリー	人数	自由記述の内容
1.現状維持	15(26.8)	特別にない(12人) 人) 今のままでよい(1人)
2.ボランティアの充実	11(19.6)	もっと多くの種類のボランティアを紹介してほしい(6人) もっとボランティアを紹介する地域を広げてほしい(5人)
3.悩み等の相談窓口の開設	10(17.9)	ボランティア活動中に悩んだ事を相談できる人や環境を設置してほしい(4人) 活動に対するフィードバックやスーパーバイズがほしい(2人) ボランティアに関する勉強会を開いてほしい(1人) 活動をしてもやりっぱなしになっているため、活動を振り返る場がほしい(1人) そのボランティアが危険なものでないかどうか判断してほしい(1人) ボランティア先との連携が難しいので仲介してほしい(1人)
4.事前情報の提供	6(10.7)	活動内容の詳しい説明がほしい(4人) そのボランティアの活動内容や雰囲気などを事前に情報提供してほしい(2人)
5.講義との兼ね合い	3(5.4)	ボランティア活動での講義欠席については、公認欠席にしてほしい(2人) 単位を出してほしい(1人)
6.その他	4(7.1)	ボランティア証明書がほしいだけで活動している学生をやめさせてほしい(1人) ボランティアに必要な最低限の知識やマナーの指導してほしい(1人) 一人で参加するのは勇気がある事だったので大学で参加者を募ってほしい(1人) 将来の職業につながるボランティアを紹介してほしい(1人)
7.無記入	7(12.5)	
合計	56(100.0)	

3. 今後の支援

伊藤 (2003) は、大学教育におけるボランティア活動について、米国の事例と日本における展開の課題について論述した中で、体験教育の重要性を指摘している。体験教育とは、1) 現場に身を投じ、知的にだけでなく感性も含めた全人的な体験をし、2) 「ふりかえり reflection」という作業を通して体験を言語化し、3) それを学問的なフレームワークとの関係で理解し、4) その理解に基づいて次の体験に具体的に備えることとし、このプロセスにおいて重要なのが「ふりかえり」であり、かつ、それを可能にするスーパーバイザーの存在であり、これらが日本の大学がボランティア活動を取り入れる際の課題であると指摘している。このように、心理臨床の現場では導入されているスーパーバイズや研修会を、ボランティア活動にも取り入れる必要性を指摘している。

本研究では、大学での支援として、現状のままを望む者が多かったが、相談窓口の開設やスーパーバイズや勉強会等を大学で実施することへの要望は、前述の伊藤 (2003) を始めとする多くの先行研究で見られた結果と同様にやはり強かった。このような支援要望に対し、本学では、学生課、クラスアドバイザー、ゼミナール教員、学生相談室等において以前から個別対応されていると言える。よって、さらなる支援を考えるならば、自己啓発や、心理臨床への自己適性や自己のキャリア形成を見つめる機会となる場の設定と考えられよう。具体的には集団によるボランティア勉強会や、自己の活動体験を他者と共有し、さらに自己の体験を深めるエンカウンターグループの実施等と考えられる。しかし、本学科は、心理臨床家の養成を主としているわけではないため、集団構成やグループの目的の明確化等について十分に検討を重ねてから実施する必要がある課題と思われた。また、ボランティアの単位化の要望が見られたが、松浦 (2003) 等でも述べられているように、やはり十分な検討を要する課題である。特に、ボランティア活動とは、主体的な実践活動を通じて自己実現をはかり、①自発性、②無償性、③公益性をもった活動であり (内海ら,1999)、本来は、学生

の主体性に任せられている面が強い学外の活動である。したがって、本当にその支援を大学で行う必要があるかの検討をも行った上で、支援の方向性を探る必要性も示唆される。

V. 今後の課題

本調査の対象者には、教職希望者も多いため、教育実習の事前体験学習としてのボランティア活動の効果について明らかとすることが今後の課題と言えよう。さらには、ボランティア活動での体験をキャリア形成の中に位置づけるようなキャリア支援も、今後の課題と思われた。特に、ボランティア活動とキャリアについて関連させた先行研究は、宮崎 (2002) を除いてほとんどない。しかも、この研究の調査対象者は60歳以上の男女であり、自立した高齢者による高齢社会づくりへの提言を研究目的とし、キャリアの再構築の重要性を示唆したものである。よって、大学生を対象とした研究は見当たらず、まさに自己のアイデンティティの確立とともにキャリア形成も行う段階にいる青年期の学生に関する研究が望まれると言えよう。

引用文献

- 富重貴志 2002 学生のボランティア動機に関する探索的研究—超高齢者への談話ボランティアに対する学生の意欲との関連— 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要 第7号 Pp.43-53.
- 藤井和枝・金子恵美 1998 保育実習 (施設実習) の事前体験学習としてのボランティア活動の効果と課題—埼玉純真短期大学の事例に関するアンケート調査から— 保母養成研究 第16号 Pp.21-35.
- 藤井和枝 2002 事前体験学習としての保育所におけるボランティア活動が保育所実習に及ぼす効果と課題—埼玉純真短期大学の事例から— 埼玉純真女子短期大学『研究紀要』 第18号 Pp.23-43.
- 飯田良子 2002 保育科学生によるメンタルフレンド活動に関する一考察 香蘭女子短期大学研究紀要 45, Pp.157-163.
- 伊藤美奈子 2001 メンタルフレンド事業に関する実態調査—メンタルフレンド活動の実際と、その成

- 長と悩み— お茶ノ水女子大学人文科学紀要 第54巻, Pp.277-289.
- 伊藤高章 2003 大学教育におけるボランティア活動—米国の事例と日本における展開の課題— 桃山学院大学キリスト教論集 第39号 Pp.1-28.
- 岩田みどり 2001 ボランティア体験による障害児・者に対する学生の態度・認識への影響に関する研究 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 第14号, Pp.73-78.
- 柿原加代子・市江和子・渡辺雅子・大須賀和子 2003 看護学生の入学時におけるボランティア活動に関する意識 日本赤十字愛知短期大学紀要 14, Pp.39-48.
- 金子恵美・藤井和枝 1998 保育実習の事前体験学習としてのボランティア活動—活動の実態とその効果— 埼玉純真女子短期大学『研究紀要』 第14号 Pp.1-43.
- 金崎良三 2005 スポーツ・ボランティア研究(1)—大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意識と実態— 佐賀大学文化教育学部研究論文集 Vol.9, No.2 Pp.201-212.
- 倉掛比呂美・大谷直史 2004 大学生にとってのボランティア活動の意味 鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学 第5巻 第2号 Pp.209-227.
- 松浦善満 2003 教員養成学部学生によるスクールボランティア活動のもつ意義と役割—教育実践教室における事例研究から— 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第53集, Pp.177-186.
- 宮崎冴子 2002 生涯学習・ボランティア活動に関する心理学的考察 東京経営短期大学紀要 第10巻 Pp.39-51.
- 文部科学省 1997 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(教育職員養成審議会第1次答申)
- 文部科学省 2002 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申)
- 森法房 2002 山口県立大学における学生のボランティア活動に関する調査報告 山口県立大学社会福祉学部紀要 第8号 Pp.39-53.
- 仁平典宏 1999 新しいボランティア観のインパクト 箕浦康子編 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房 P.106-122.
- 西上あゆみ・西岡ひとみ・稲垣美紀・田中克子・末原紀美代 2001 総合病院における災害医療訓練にボランティア参加した看護学生の学び 大阪府立看護大学紀要 7巻, 1号 Pp.47-53.
- 酒井朗・伊藤茂樹 2001 不登校児のケアにおけるボランティア活動の社会的意味—児童相談所におけるメンタルフレンド活動を中心に— お茶ノ水女子大学人文科学紀要 第54巻, Pp.159-176.
- 谷田勇人 2001 福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析 社会福祉学 第41巻第2号 Pp.83-94.
- 総務庁青少年対策本部(編) 1994 青少年とボランティア活動「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書
- 内海成治・入江幸男・水野義之(編) 1999 ボランティアを学ぶ人のために 世界思想社

要旨

本研究においては、学生にとってのボランティア活動のもつ意味について明らかにし、今後、必要とされる支援について考察することを目的とした。そこで、本学子ども心理学科2～4年生108人に対し、ボランティア活動の実態や、ボランティア活動を通じての学びや悩み、今後の支援ニーズについて調査を実施した。

その結果、多くの学生がボランティア活動を体験していることが明らかとなった。さらに、ボランティア活動を通じて生じる悩みに対する支援を求めていることが明らかとなった。よって、ボランティア体験を自己のキャリアと結び付けて考えるようなキャリア支援の必要性や、心理面へのサポートの必要性が示唆された。

(2005.10.28 受稿)